

## 第 94 回全国高等学校野球選手権大会 審判技術向上研修

平成 24 年 8 月 10 日～12 日

阪神甲子園球場

新潟県高等学校野球連盟北支部 藤井義文

北支部 佐藤 誠

南支部 大海正博

南支部 遠藤和則

初めに

この度、第 94 回高等学校野球選手権大会に審判技術向上研修の場として参加させていただきました。このような機会を与えて頂きました高野連関係者の皆様、審判員の皆様に心より感謝申し上げます。

この研修の成果について、**藤井義文**は「高校野球審判の手引き」に基づいて整理し、**佐藤誠**は試合中の出来事を担当、**大海正博**はメンタル的な側面から、**遠藤和則**はテクニカルな側面からと、担当を決めて報告書を作成しました。

尚、所感については各人の率直な感想なのでそのまま掲載しました。

担当 北支部 藤井 義文

### 1・マナーと身だしなみ

私たちは、大会役員席に場所をお借りして研修を実施しました。この席には、試合に待機しているレギュラー審判員の方々や、試合を終えた審判員のほか、他県から私たち同様に研修に来ている方々など、たくさんの方々がいっぱいいました。

その方々は、皆さん正装（ズボンにワイシャツ若しくは白い Polo シャツ。）しており、まさに社会人としての身だしなみを整えておられました。会場はもちろん灼熱の太陽が降り注ぐスタンドでしたが、シートにしっかりと腰をおろし試合を観戦している姿は私たちにも緊張感を与えて下さるものでした。

手引きの中にある「心構え」の一節にある、野球に関係のある場所ではもちろんのこと、私生活においてもマナーと身だしなみには十分に注意を払い、社会人として常に審判員精神にのっとった行動であったと思います。

それらの審判員の方々の行動を拝見すると、若干参加チームにマナーの悪い行動があったのは残念でした。コーチャーが一塁のプレイで「セーフ」のジェスチャーをしたり、ランナーが同様の行動をしているチーム、バッターがホームベースに近づき投球に当たりに行く行為が見られました。ただ、多くのチームは予選を通じて指導され、勝ち上がってきたチームであり、ユニフォームの着こなしや挨拶などはスタンドから見ると、さすが甲子園出場校と感じまし

た。「心・技・体」揃えたチームこそが甲子園にふさわしいと思いました。

### 2・健康管理と精神の集中

試合中どのような条件下でも耐えうる体力と集中力が必要とあります。

やはり、甲子園はスタンドで観戦するだけでも暑さでかなりの体力を消耗します。なので、審判員の給水は頻繁に行われておりました。

球審は試合開始の序盤は、ほぼ毎イニング給水を実施しており、塁審は 2 イニング毎に給水をしておりました。

球児たちのプレイに冷静かつ正確にジャッジするためには、暑さに負けない体力と体調を崩さないための体調管理が必要であると感じました。

やはり異常な暑さのため、試合途中で審判員が交代した試合もありましたが、球児たちのプレイに正確にジャッジできない場合は、交代する勇気も必要であると思いました。

### 3・動きと野球規則の習熟

#### (1) 基本に忠実に

・甲子園審判員の方々は、「ゴー・ストップ・コール」の基本がキチンと守られておりました。どのような場面でも、この基本に忠実に審判をしておられました。この基本がしっかり出来ているからこそ、試合中いかなる事態が生じて、タイミング良く的確なジャッジができるのだと感じました。

・春の各地区講習会や北信越講習会などで、甲子園審判員の方々の指導をいただく機会があります。その講習で指導いただくことを目の前で実践していただくと、やはり「基本に忠実に」の意味が良く分かりました。審判の立ち位置などは、経験を積み重ね変わっていく場合がありますが、基本は変わらないと感じました。

#### (2) 試合進行

・研修中特に目についたのは、キャッチャーが最終打者となり攻守交替の際、防具を身につける場所を指示していたことでした。審判員の方々により若干違いはありますが、概ねネクストサークル付近で身につけさせ、ホームへ促しておりました。

・ランナー一塁での、バント処理。処理が終わった野手に守備位置に早く戻るように促したり、一塁手がボールをマウンドへ持ち込むと直ぐに指導をしておられました。

・初出場のチームには、球審が最初の守備につく際「ツーアウトになったらチェンジの時に早く守備につけるよう準備をしておいて

下さい。」とチームに指導しておりました。

- ・甲子園に出場するチームなので、基本的に攻守交替はスピーディーと感じましたが、遅いチームやノーランナーで間合いが長いピッチャーの場合は、審判員が積極的に声掛けをして進行を促しておりました。

### (3) 審判員の連携

・ツーストライクからのファールチップを球審は捕球として三振を宣告した際、攻撃チームよりワンバウンドとのアピールがあった。その際、迅速に四審が集まり協議して、ファールボールに訂正されたが、球場全体に違和感なくゲームが進行した。やはり、審判は四人の連携が大切で、疑義のある場合は迅速に集合し判断することが重要と感じました。

### 4・所感

3日間を通して感じたことは、審判員の方々が重圧のかかる舞台で、余計な力みが無く、淡々とゲームを進めていらっしゃることでした。試合の中で、特に目立つことなく、的確な位置取りで、正確なジャッジをする姿は、非常に参考になりました。主役である選手たちに必要に応じて声を掛け、ゲームを進行させる技術は、テレビでは分からない現場でこそ学べるものであります。

この経験を生かし、今後も審判員として精進して参ります。



(特別に赤井副委員長のご配慮でお借りしました)

担当 北支部 佐藤 誠

## ◆8月10日 (第1日)

空路にて大阪へ。甲子園球場到着後、赤井副委員長へ挨拶。その後、赤井副委員長と共にスタンド役員席にて試合を見学。

### 第二試合 滝川二 5-4 北大津 1時間54分※試合途中から見学

【(球) 小谷、元雄、辻、倉谷】

- ・5回表、2アウト1・3塁。北大津の投手がセットポジションをとった時、ボールを落とす。(ボーク)があった。
- ・1アウト満塁。3塁ダッグアウト前へのキャッチャーフライ。(キャッチャーが捕球。2アウト。)球審が1BUに本塁カバーへ来いと、声とジェスチャーをしていた。ファールフライでも3塁ランナーのタッグアップは十分ありえる。試合前ミーティングでの打合せが大事だと思いました。

### 第三試合 宮崎工 1-3 天理 1時間41分

【(球) 田中、山口、金丸、若山】

- ・給水は2イニングごとにグラウンドで。球審は1回終了時にも。
- ・三振ワンバンド捕球の時、アウトセーフが確定するまで、球審は打者走者を指しポイントしている。
- ・球審は投球がワンバンドで捕球された時、積極的にボール交換。
- ・1アウト2塁、ライト前のヒット。本塁でクロスプレイ。球審は最初、三本間の延長に位置していたが、プレイが起きる時本塁後方に移動してジャッジ。タッグと触塁の確認がランナーでブラインドになっているように見えた。
- ・中盤から天理高校が出てくるのが遅くなる。球審と1BUがベンチ前まで行き、積極的に声をかける。
- ・ランナー2塁でサード前へのバント。1塁への送球が逸れ、1塁手の足が離れるのが早いように見えたが、1BUは1塁手の足をポイントしアウトのコール。
- ・1アウト3塁。右打者がベース近くに立ち、インコースの投球に当たりにいく。(投球に当たったがボールの判定)球審から注意を受ける。その後、3B-2Sとなり次の投球(インコース、ストライク判定)に足を出してまた当たりにいった。マナー違反だと感じた。

#### 第四試合 香川西 1-3 鳥取城北 1時間49分

【(球) 野口、桑原、美野、中山】

- ・2BUは内野が前進守備の時、外に出ない。
- ・ノーランナー、センター前ヒット等でも、3BUが2塁のカバーに(2BUが深く位置しているので、2塁でプレイがあった時に間に合わない可能性が)
- ・本塁で2回クロスプレイがあったが、球審は2回とも本塁後方(打球判定している位置の真後ろ)で判定。ブラインドになりやすいので三本間延長で見た方がよく見えるのではと感じた。

#### ◆8月11日(第2日)

##### 第一試合 浦和学院 6-0 高崎商 2時間2分

【(球) 岸、西貝、乗金、大田】

- ・1アウト1塁エンドラン。ライトフライでアウト。1塁ランナー1塁へ戻れずアウト。  
2BUが1塁の判定。球審は1塁方向へほとんど動かず。もっと距離を詰めるべきなのでは。
- ・内野手が全員集まり守備のタイム中、センターとライト2人がセンターで話をしているのを球審が見て、2BUに教え、それぞれの定位置に戻るよう注意。
- ・1BUはノーランナーセンター前ヒットの時、ピボットターンして打者走者の触塁を確認。2塁、本塁どちらにでもいけるようにしている。
- ・内野ゴロ、1塁でアウトの時でも1BUは判定後もボールから目を離さない。(確保の確認)

##### 第二試合 日大三 1-2 聖光学院 1時間58分

【(球) 窪田、小林、尾崎、佐藤】

- ・1アウト2塁。2B-2Sから次のワンバンドの打球を打者が空振り、捕手が捕球し打者にタッグ。日大三から球審に確認(恐らくファールではないのか)があり四氏で協議。ファールに判定を変更し2B-2Sで再開。
- ・ランナー1塁で捕手のみが投手のどこへ行き話をする時は、タイムをかけない。  
スピードアップのためか。
- ・2アウト2塁ライト前ヒット、本塁でのクロスプレイ。判定はアウトだが、コールが早いと感じた。(確保の確認)

#### 第三試合 富山工 4-5 宇部鴻城 2時間2分

【(球) 若林、北田、土井、藤井】

- ・球審と捕手との距離が広い。
- ・ノーアウト1・3塁、2B-2S。次のアウトコースの打球を打者が空振りしベース前に出る。捕手は2塁に送球し、1・2塁間でランダンプレイ。(球審は妨害をとらず)  
ランダンプレイ中に3塁ランナーがホームイン。(ホームへの送球がそれでセーフ)  
捕手と打者の接触もなく捕手もスムーズに2塁へ送球したので妨害をとらなかったのか。

##### 第四試合 札幌第一 3-5 佐世保実 2時間21分

【(球) 長谷川、堅田、中島、豊田】

- ・ノーランナーセンター前ヒット。2BUが2塁に戻る際ボールから目を離して(ボールに背を向けている状態で)戻っている。カットに行ったセカンド、もしくはセンターが1塁へ送球したら送球線に入り大変危ないと感じた。ショート側から回りこんで戻った方が良かった。
- ・札幌第一の投手はランナーがでると間合いが長くなる。球審は捕手に早く座りサインをだすように指示。また先頭打者が出てくるのが遅く球審が何回か迎えに行ったり、声をかけて早く来るよう促す場面があった。
- ・5表2アウト1塁。1B-1Sから次の打球がストライク。守備側は三振と勘違いしてダッグアウトに引き上げる。(打者は三振と思ってないのでまだ打席付近に)1塁ランナーは3塁へ向かう。その途中で球審がボールデッドに。四氏で協議し、場内説明後2アウト3塁1B-2Sで再開した。  
※後にスコアボードのカウントミスということが分かった。  
試合前半はテンポが悪く球審は両チームに一生懸命追い出しや声かけを行っていた。その事ばかり気になりスコアボードのカウントミスに気付かなかったのだろうか。(この後もスコアボードのカウントが間違っている時が何回もあり球審が記録の方へ教えていた)  
カウントミスはトラブルの元におかしいと思ったら時間をかけてでも正しいカウントに直すことが大事だと感じた。

## ◆8月12日（第3日）

### 第一試合 旭川工 8-9 龍谷大平安 3時間1分

【(球) 元雄、三宅、宅間、辻】

- ・2アウト2塁センター前ヒット。センターからホームに送球するも2塁ランナーはセーフ。打者走者は2塁へ向かったがホームからの送球により2塁でアウト。(タイムプレイ)
- ・ノーアウト1・3塁でスタイズプレイ。ランナーは回りこんでスライディングするもアウト。PLは本一塁間とホームベース後方の中間ぐらいに位置してジャッジ。この位置からもう一歩動ければ良い位置取りができると感じた。
- ・1アウト1・3塁。1B-2Sから次の投球の時、1塁ランナーが盗塁。打者は空振りして捕手の前に入る。捕手は2塁に送球してランダンプレイになるが1塁走者はタッグアウト。3アウトでチェンジ。球審は妨害とらず。

### 第二試合 成立学園 0-3 東海大甲府 1時間16分

【(球) 橘、小谷、倉谷、岡田】

- ・1回表終了時、球審が1塁ダッグアウト前に来て、「2アウトになったらチェンジの時に早く守備につけるよう準備をしておいて下さい。」とチームに指導。
- ・セカンドゴロで1塁への送球が逸れてセーフ。余裕でセーフだが1BUはオブザバックをいれる。
- ・ランナー2塁で右中間へのフライ。2塁ランナーはタッチアップ。2BUは1・2塁間中間に移動。その時の位置が1・2塁の走路から約1mマウンド寄りにいた。もう少しステップバックした方が、2塁のタッグアップを楽に確認できるのでは感じた。
- ・1BUはホームへカバーに行く際、打者走者の1塁触塁をホームへ向かいながらコーチャーズBOX当たりで確認。
- ・四氏が初回から積極的に声かけを行っていたため非常にテンポが良い試合。試合もあっという間に終わった感じがした。

### 第三試合 光星学院 4-0 遊学館

【(球) 古川、若山、山口、金岡】

- ・途中まで見学。その後伊丹空港まで移動し、空路で18時30分に新潟到着。

### 3日間の総括

3日間で約10試合、グラウンド間近で研修させていただきました。行く前は甲子園の審判はどのようなアンパイアリングをするのだろうかと思っていましたが、現地に行き分かったのが、皆「基本に忠実に」、の一言に尽きると感じました。大舞台でプレッシャーがあると思いますが、淡々と目の前のプレイをいつも通りにジャッジしているように感じました。また選手へ気遣いも上から目線でなく、同じ目線で優しく接し、判定だけでなく様々な事に気を配っていると感じました。私たちはスピーディーな試合運び、マナーの徹底、気配り等、まだ多くの課題があると思います。野球は進化しています。それに遅れないよう私たちも新しい事にチャレンジし続けなければならないと感じました。また、高校野球という魅力あるスポーツの審判委員として技術の向上だけでなく、人間的にも成長しなければならないと感じました。まだまだ未熟者ではありますが、スキルアップに努めていきたいと思っています。また多くの審判委員と意見を交換し、糧にしていきたいと思っています。

最後に、貴重な経験をさせていただき大変ありがとうございました。県高野連の先生方、審判長ならびに審判委員の方々に深く感謝いたします。



(グラウンドの外では気さくな赤井副委員長)

担当 南支部 大海 正博

- バックネット裏スタンドの役員席で見させていただいた。甲子園のレギュラー審判委員の方々もその席で見て居られたが、服装は、皆、白のYシャツ、紺・黒のスラックス、黒の靴である。  
(一社会人、一審判委員としての身だしなみ、服装。そして球場、野球への敬意の表れ)
- 攻守交代時の声かけが大きな声で、そして表情が非常に暖かく感じた。  
(スタンドが満員だった為、どういう言葉をかけているのかは、分からなかったのが残念だったが、表情が暖かい。これも選手に気持ち良くプレイしてもらえる様にとの気配り、優しさ。結果、スピーディーなゲーム展開となるのでは・・・)
- 早くボールをピッチャーへ戻させる工夫。  
(ノーアウト、ランナーなし。バッターランナー 一塁アウト。一塁塁審、アウトをコールしてすぐ定位置に戻るのではなく、一塁手の方を向き、動向を見守る。)
- ゲームのリズムを作る。  
(球審と、ピッチャーのリズムが合わないと思われるゲームを見ました。決して球審が合わせられなかったと言う事ではなく、見ても、ゲームの間が悪いと言うか・・・見えて分かった事。キャッチャーがすぐ座らないため、球審が何度も腰に手を添えて座るように促していた。それに伴いピッチャーのテンポも悪い。そうするとやはり時間も長くなりゲームのリズムも悪くなる。審判員がいかにながれを作って進められるかを考える)
- フォーマーションのサイン  
(研修で見たゲームのほとんどのクルーがサインを送っていた。自分も何度か、前ミーティングで  
<今日は、サインを出してやってみよう>という事でやった事があった。サインを出す事でそのクルーの一体感みたいなものを感じ動きやすかった事を覚えている。出した方がいいと思う)

- ランナー有りの場合の1,3 塁塁審の正対の仕方  
(例・ランナー1 塁。1 塁塁審、ピッチャーが投球するまでは、ピッチャーに正対。投球と同時にハンズオンニーを解き、今度はホームに正対。自分は、ピッチャーに正対したままでいた。)
- ゴー・ストップ・コールが基本  
(最後には、やはりこれができているかどうかで、説得力、信頼できるジャジメントになる)

#### <所感>

甲子園のレギュラー審判委員の方々との違いは何か？そんなことも考えながら研修させていただきました。  
バタバタしていない事。無駄な動きがない事。そして堂々としている事。これによって安心して選手、あるいは、観客がゲームに集中できるのだと思いました。  
テレビだとある1ヶ所しか画面には映りませんが、今回、役員席(バックネット裏、少々1 塁側、最前列から上10 列目位までの一角)で見させて頂き、全体の動き、そして何より審判員の暖かな表情を見られたことが印象に残りました。以前、県内の甲子園に出られた監督さんから「甲子園ってすごく球場全体が優しい所だった」という話を聞いた事がありました。その優しいと思わせるものを作っているのは、観客の暖かい応援も勿論ですが、審判員の「表情」「声かけ」というのも大切な要因だと思いました。  
今回、間近で見させて頂き「審判員とは・・・」を改めて考えさせられました。  
もう一度、初心に戻り「日々の態度がそのままグラウンドに出る」を肝に銘じ、少しずつ前進していきたいと思います。  
最後になりますが、貴重な場を与えて頂きました、新潟県高等学校野球連盟関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。

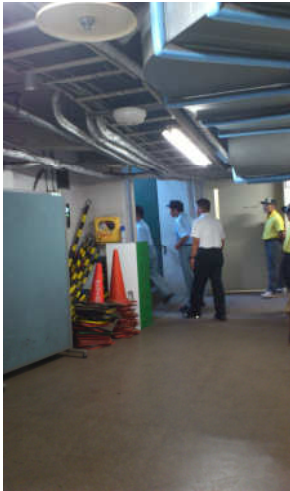


担当 南支部 遠藤 和則

研修会・講習会となると、アウト・セーフ、ストライク・ボールといった間違い探しになってしまい、重要な部分を見逃してしまっているのではないかと思うことも多々ありました。

個別のプレーに関してはそれぞれの方のそれぞれの見方があると思っています、研修中に見た試合の中にも疑問に思う場面はいくつかありましたが、その状況を切り取って話をするのではなく、せっかく甲子園に来ているので今回は大きな視点で見ようと思いました。

その前に…下の写真は 4 人のクルーが実際の試合に向かう後ろ姿です。貴重な場面を見させていただきました。



(その後ろ姿に緊張感が漂っています。)

今回は、実際の試合中に感じた事や実際の事例を以下のようにまとめてみました。

#### 1. 1 塁塁審のジャッジについて。

・各種講習会では、各塁への送球に関しスタンディングセットポジションでコールをしても良いとされていますが、甲子園の試合では 1 塁フォースプレーの送球に関してほとんどの場合ハンズ・オンニー・セットポジションでコールをしていました。

最初は意識なく見ていましたが、積極的に確認をするとやはりハンズ・オンニー・セットポジションでのコールが多く場面で行われていました。

当然のこととしてハンズ・オンニーでジャッジする為には早くポ

ジションに入らなければならず、全てにおいて重要な事と気付かされます。

そして、やはりその効果なのか、ジャッジが『静から動』へ切替えられていて、次に行くコールについて引込まれてしまう様な感覚になりました。

以前の北信越講習会でもフォースプレーの良い送球時のみにハンズ・オンニーを使うと、講師先生が話されていた意味を今回改めて感じさせられました。

#### 2. フォーマーションの確認について。

・地方の試合でもランナーがいる際に、各審判員が動く方向をサインによって確認を行っていますが、全員が確実にやっているかと言えばそうではありません。

古い話になりますが 10 年位前は審判員がサインを出すと「目立つ様なことはするな」「生意気だよ」と、言われた時期がありました。

北信越講習会ではサインについて質問をしましたが時間の関係で回答がないまま終わってしまいましたが今回改めて確認すると、「確実にやる事になっている」との回答でした、しかも全員がアンサーも含め確実に行っていました。

#### 3. 球審の位置する場所について。

・ホームクロスプレーの際、状況（返球される方向）によって臨機応変の対応は当然ですが、3 塁線の延長上に位置することが最近の講習会等では基本とされています。

しかし、今回感じたのはレフトからの返球は、左バッターボックス周辺からダイヤモンド内へ回り込む場面や、ライトからの返球は 1 塁延長線上、センターからの返球や、内野ゴロ・スクイズなどの時間的に余裕のない場合などはホームベースの真後ろに位置している事が多いように感じました。ちょっと昔の位置取りを思い出してしまいました。

ほとんどの場合が 3 塁線の延長上に位置していると思いますが、たまたまこの様なケースが研修中多かっただけなのか疑問が残りました。

その後可能な限りテレビ観戦をしていると、やはり基本通り 3 塁延長線上に位置しています。（たまたま偶然が重なったようです。）研修会なので、各種講習会でお世話になったレギュラー審判委員の方もおられたので質問すればよかったと反省しています、来春の講習会では確認したいと思います。



(大会役員席にはレギュラー審判委員の姿もあります。)

#### 4. プレーヤーへの声掛け。

・今回 3 日間の研修では約 10 試合を見ましたが、平均試合時間が 2 時間を超える試合が半分ほどありました。(1 試合だけ 1 時間 16 分という驚異的な試合がありました)

攻撃・守備側への声掛けは積極的に行っていました。

交代時の声かけはもちろん、送球・外野からの返球・ファウルボールを取ったなど守っている内野手などへも積極的に声をかけていました。

別の話になりますが、試合時間の短縮の意味も含め「ランナー単独 1 塁」、「1 塁・2 塁」の時、捕手 1 人がマウンドへ行く時にはタイムをかけない地域もあります。北信越地区では福井県がタイムをかけず捕手をマウンドへ促します。

その際、各ランナーに動くような素振りがあれば即刻タイムをかけるそうですが、春の北信越大会で福井県の審判員の協力をいただき実際の試合で行ってみました。

タイムをかけない事は新潟県の私にとって新鮮でしたが、捕手が戻ってきてからプレーコールが必要ないのでなんとなく寂しさを感じました。

#### 5. 用具点検

用具点検を実施する時期・方法はそれぞれの地域によって異なりますが、甲子園では試合間隔が 30 分と決まっているため前試合の選手がベンチを出て次のチームがベンチ入りする前に両チームに 3 人～4 人の審判委員で行っている。



(普段とは大違いで真面目な顔で研修中の遠藤です。)

#### 6. 試合のリズムを掴む

試合全体をコントロールする意味も含めリズムは非常に大切なものです。

投手と打者、投手と球審そういった個々の積上げが試合のリズムを作ります。ゲットセットのタイミングやコールのタイミングすべてが重要で、このリズムが狂うと後半になって判定が乱れたり、無駄な力が入り疲れてしまうと日野委員長も話されていました。

研修中の事例で話をしますと、2 死ランナー 1 塁、本当はカウント 2-1 なのに 2-2 と間違えていて次の投球がストライク、三振と思ひ野手が引き上げている間に走者が 3 塁に達してしまった場面を覚えている方もいると思いますが、この場面だけを切取って見るとその通りですが、これは前打者のカウントがクリアにされないままアウトカウントだけが増え、2 死となったものの BS カウントが残った状態から発生しています。

しかし、実は初回から走者がいる・いない関係なしに投手の投球リズム、攻撃側のリズムが悪く球審から数回指摘をされていました。

スタンドで見ていた我々も初回から同じような感覚があり、リズムの悪さを話していた矢先の 5 回にこの事象が発生してしまい、やはり影響があったのかと思ったくらいです。

## 7. 第 94 回全国高等学校野球選手権大会 審判技術向上研修で強く残ったこと

研修をさせていただいた中で特に印象に残った場面は 11 日の第一試合、試合開始は 8 時この時点で 30℃を超える暑さの中、試合中選手交代が多く特に投手が両チームで 5 人登場するという通常でも 2 時間を超えるペースの試合で、さらに 9 回裏 2 死ランナーなし得点差 2 点あと 1 人で終了の場面から同点となり延長へ入った。

この頃には気温も 40℃近くになり結果として試合終了が延長 11 回、3 時間にも及ぶゲームとなり見ている我々がせめて球審だけでも少しでも休ませてあげられないかと思う様な過酷な状況の中、プレーボールの時と何も変わらず同じペースで、同じ表情で目立とうとすることもなく、辛そうな素振り・表情を微塵も見せることもなく淡々とジャッジを行っている球審の姿を見たときに、自分に足りないものはこれではないかと感じさせられました。

上位の試合の目立つポジションでジャッジをしたいと思う、これ自体悪いことではありません。

しかし、与えられた場面で与えられたポジションをミスではなく、ロスをなくし粛々と試合をコントロールしていく事がどれほど大変でどれほど重要な事なのか、上記試合の球審を務めた元雄審判委員の姿を直接見ることができ、今日までの自分の愚かさに改めて気付かされました。

昨年の第 1 回審判技術向上研修に参加された、北支部杵鞭審判員の報告書の中に、赤井委員長の話しとして「甲子園で審判をやるのは精神的に結構きつい。その審判委員の心境を感じながら研修してください」と、ありました。

私自身その言葉の意味を十分理解出来ていないかもしれませんが、甲子園で活躍されている審判委員の姿を直接見た我々が、これから新潟県に戻った時に何をしなければならないのかと、とても大きな「課題（テーマ）」を突きつけられた思いになりました。

最後になりますが今回このような場面でご一緒できた藤井審判員（北支部 旧下越地区）・佐藤審判員（北支部 旧新潟地区）・大海審判員（南支部 旧中越地区）、皆さんと普段ではできないような野球談義をさせていただき本当に有意義な時間を過ごすことができました。

また、良いプレーを間近で感じることでできる環境を与えていただきました審判長をはじめ、県高校野球連盟各理事の皆様、及び関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。



(本当に有意義な時間を過ごすことができました。)